様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　６月１９日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2006～2008
課題番号：18720012
研究課題名（和文）　近代中国における「社会」認識――思想史分析を通じて

研究課題名（英文）　Recognition about society in modern China

研究代表者
川尻　文彦（KAWAJIRI FUMIHIKO）
帝塚山学院大学・人間科学部・准教授
研究者番号：20299001

研究成果の概要：
近代中国の知識人たちが「社会」というものをどのように認識したのかについてこの間、さまざまな角度から研究を深めた。ひとつには society の中国語の訳語として「社会」がどのように定着していったのかについて考察した。それは従来からある「群」という中国語に「社会」がとってかわる過程でもある。また「社会」というものをどのように考えたのかについても多面的に考察を加えた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	600,000	0	600,000
2007 年度	600,000	0	600,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	1,800,000	180,000	1,980,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・中国哲学
キーワード：近代中国　思想史　社会　梁啓超　明治日本　概念　東アジア

１．研究開始当初の背景
従来の中国近代思想史研究では近代中国において活躍した大思想家をとりあげその人物の言説を深く分析することが主流であった。康有為しかり、章太炎しかり、李大釗しかりである。
また思想史の発展を重視する立場からは、洋務―変法―革命の三段階発展論が存在し、最近ではこの図式をそのまま歴史にあてはめて議論することはさすがにすくなくなっていたものの、この図式は研究者の思考を暗暗里にしばっているし、またこの図式に代わるものを提示できてはいない。そのような研究背景のものでいかなる中

国近代思想史の「語り」が可能になるのか？という問いが私のなかにつねにあった。

２．研究の目的

研究の目的は中国近代思想史をこれまでにない角度から叙述することにつきる。
上で述べたように、人物研究的な思想史研究や「革命」というゴールに向かっての発展段階的な思想史研究の二つを打破したいとの目的がある。
これをよりおおきな形でいうならば、近代中国における「モダニティ」の解明ということである。
ただしこの「モダニティ」という概念が学問的に有効であるかどうかは、私自身は懐疑的であるが、他に有効な語がないので、しばし暫定的に使用することにする。
また「モダニティ」は伝統と近代の二項対立を容易にイメージさせ、それは同時に西洋の衝撃、中国の反応という図式ともつながりやすい。
私が意図したいのはそのような二項対立的な「近代」ではなく、近代東アジアにおける「多元的で多層的なメディア」空間の存在であり、そのような「空間」のなかで東アジアの「近代」がすこしずつ立ち上がってきたイメージである。
よって「モダニティ」も一元的に定義づけることができるものではない。
「社会」意識の変遷もそのような研究のために格好ケース・スタディーになるであろう。
近代中国における「社会」の生成を検討するためには、たんに社会制度の整備を問題とするだけではたりない。またさらに、society の訳語の問題に限定して、訳語の定着過程を追うだけでも足りない。
まさに「社会」の語を通じた中国の「モダニティ」の解明の必要が迫られるのである。

３．研究の方法

関連文献の読みこみが、この研究の大前提提になるが、そのうえで以下の方法を意識した。
ひとつには、中国近代思想史を考える上で「日本要素」を最大限に考慮にいれるということである。これは「日本要素」を過大に評価し、中国人の思想家や思想文献すべてを「日本の影響」の観点から読み直すということを意味しない。そうではなく、「日本要素」を客観的に捉えなおすということである。私たち研究者は中国人の残した文献のそこかしこに日本の思想家や日本語書籍が登場することをよくしっている。しかしそのことに関心をよせ、深く調べてみることを行ったものはすくない。
そのような作業はたんに「種本さがし」や、あるいは西洋思想受容にあたっての「亜流」の要素を過大評価するものであるものとして、いわば「無視」されてきたものである。
梁啓超がもっとも生産力旺盛で活躍した時期の思想を考えるうえでも日本亡命時期を無視できない。その彼における「日本要素」の研究はいうまでもなく、不可欠でである。一例をあげれば、ブルンチュリの受容は彼の思想的な「転向」とふかく結びついているが、梁啓超におけるブルンチュリ受容を日本経由のものとして考えた場合、その周辺に存在するさまざまなことがら、たとえば明治におけるブルンチュリ受容との関係、そもそもどのような文献を用いてブルンチュリを読んだのか、中国語への紹介、翻訳状況などについて、狭間直樹の研究を除いてなきに等しい。
これはあくまでも一例にすぎないが、今後も深める必要のある課題であると考える。
ふたつめは「概念」史的な視角を導入することである。
「概念」史といえば、ラブジョイの提起した「観念の連鎖」がまず想起されよう。ラブジョイの議論は古臭く、歴史の現場を再現するための学問的方法論としては今日、ほとんど顧みられていないものではないか？
私もこの方法をとらない。
もうひとつ、中国思想史研究においてオーソドックスな方法論として、理、性、気など思想史上の重要概念に着目した研究がある。これは中国の歴代の思想家たちが、これらの概念に着目して長い間、論争をくりかえしてきたため、この「概念」を後世の研究者がとりあげ、思想史の再構築をはかることはおおいに意味のあることであると思われる。
しかし、20 世紀初頭以降の中国思想史を考える際には有効な方法とはなりえないように考える。
まず何をその概念として取り上げるかと決めることからして困難である。よって前近代思想研究の類推で近代思想研究を行うことはできない。
では私は何をもって「概念」研究というのか？　この点については私自身もまだ模索中であり、はっきりとした結論があるわけでない。
ただし言えることは、ひとつの概念――たとえば「民主」なり「自由」なり――だけをとりだして云々しても無意味であるということである。当該概念に近似する諸概念との「関係性」につねに注意をはらいなが

ら分析する必要がある。「社会」であれば、「群」や「江湖」など、あるいは「社会主義」などの生起との関連にも注意をはらう必要がある。
みっつめには、近代中国において大きな役割を担ったのは「翻訳」された「概念」であるということである。つまり西洋から「輸入」されたものであるということである。「社会」であれば society がまさしくそれに当たる。
西洋語をいかに翻訳し、訳語を選択し、どの訳語が残り、どの訳語が淘汰されたのか、それ自体大きな問題である。
それ以上に私が注目したいのは、「文化翻訳」という視点である。西洋の概念の翻訳には、ことばの置き換えではすまされない、様々な文化背景に付随する問題をかかえこんでいる。
そのようなことがらにも着目したい。
よっつめに、以上のような問題意識から多くの文献の再発掘を試みたい。このことはたんに新史料を探し当てているというようなことを意味するのではない。既存のテキストにあっても従来、十分に焦点があてられてこなかった部分についても焦点があてられ、新しい分析を試みたいと考える。

４．研究成果

具体的な成果については下に列挙した論文を参照していただきたい。
いくつかの研究成果を公表した。
「社会」や「社会契約説」あるいは「社会主義」に関する論著も含まれる。
「社会」の探究には隣接する諸概念の探究が不可欠であることを意識してのことである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 13　　件）
（以下、すべて査読有り）

川尻文彦「日本における東アジア論」“21 세기의 동아시아의 문화와 윤리 패러다임”한국철학사상연구회,2006 년 4 월、140－153 頁（韓国哲学思想研究会、2006 年 4 月）。

川尻文彦「20 世紀初頭の「初期社会主義」『東アジアの文化交流と相互理解』高麗大学校日本学研究センター、2006 年 10 月、56－70 頁。同論文韓国語版（62－80 頁に掲載）。

川尻文彦「世界政治のなかの清末中国」『現代中国研究』第 20 号、2007 年 3 月、57－62 頁。

川尻文彦「近代東アジアにおける思想連環の一側面――梁啓超の「新史学」」、『東アジア国際理解の理念と実践』帝塚山学院大学国際理解研究所、2007 年 3 月、22－29 頁。

川尻文彦「清代思想文化史研究の行方」『孫文研究』孫文研究会、第 41・42 合併号、2007 年 3 月、55－58 頁。

川尻文彦「近代中国における社会契約論受容の諸相」、『近きに在りて』2007 年 6 月、119－133 頁。

川尻文彦「フェアバンクと日本：戦後東アジアの学問再編」、『再演京都アメリカ研究夏期セミナー：人と思想の国際交流』第 3 号、32－35 頁。

川尻文彦「清末“革命”再考」日本京都大学人文科学研究所主編『日本東方学』（第

一輯）北京中華書局、2007 年 8 月、307－321 頁。

川尻文彦「中国ナショナリズムをいかに論じるのか」『現代中国研究』第 21 号、2007 年 10 月、2－9 頁。

川尻文彦「近現代リベラリズム研究の現状と課題」『近きに在りて』第 52 号、2007 年 11 月、118－122 頁。

川尻文彦「清末江南文人の読書生活（序論）」『近きに在りて』第 52 号、2007 年 11 月、86－88 頁。

川尻文彦「中国近代経学をいかに論じるか」、『アジア教育史研究』第 17 号、2008 年 3 月、76－80 頁。

川尻文彦「清末の「自由」」、『中国学志』剝号、2008 年、1－34 頁。

〔学会発表〕（計 24　　件）
以下、すべて川尻文彦

China,Du Contrat Social and Modern China, Shingapore National University,Hiisotrical Society of Twentieth century, China June 26-28

「晩清西学与明治日本」中国人民大学清史研究所国際シンポジウム「西学与清代文化」、2006 年 8 月 24 日―26 日。
「東アジアにおける思想連環の一側面――梁啓超の「新史学」」北京清華大学中文系「東アジア国際理解シンポジウム」、2006 年 9 月 13 日。

「清末の社会主義」、京大人文研研究班（石川禎浩「中国社会主義文化の研究」2006 年 10 月 6 日。

「20 世紀初頭の東アジアにおける「初期社会主義」」、韓国・高麗大学「東アジアの文化交流と相互理解」シンポジウム、2006 年 10 月 14 日。

「中国近代思想と概念史――「民主」を中心にして」、国際日本文化研究センター「近代東アジアにおける知的空間の形成――日中学術概念史の比較研究」第 6 回研究会、2007 年 2 月 24 日。

「陶行知・デューイ・社会」、アジア教育史学会関西部会、神戸女子大学、2007 年 2007 年 3 月 24 日。

「清末中国接受「社会契約論」之諸相」、「従鎖国閉関到達爾文世界世界国際学術研討会」山東大学韓国学院（威海分校）2007 年 5 月 18 日―21 日。

「陶行知とデューイ」、京大人文科学研究所森時彦教授「20 世紀中国社会システム」、2007 年 6 月 1 日。

「東アジア「近代」の知識人は「近世」をどう見たのか」、「東アジア「近世」の多様性――中国、日本、朝鮮」国際シンポジウム、弘前大学。2007 年 6 月 30 日。

「加藤弘之と「進化」」、「文化の往還」国際シンポジウム、北京大学、2007 年 10 月 16～18 日。

「清末の自由主義」、石川禎浩研究班「中国社会主義文化の研究」、京都大学人文研、2007 年 12 月 7 日。

「清末の「自由」」、大阪市立大学中国学会、2007 年 12 月 8 日。

「草創期、東京専門学校のアメリカ政治学と梁啓超」、台湾中央研究院欧米研究所、2008 年 1 月 29 日。

「清末的功利主義」（中国語）、京大人文研「中国社会主義文化の研究」（京大人文研准教授石川禎浩）、2008 年 6 月 6 日。

「近代日本・清末中国における功利主義――「概念」連鎖の視点から」、国際日本文化研究センター、2008 年 6 月 21 日。

「万国公法の受容をめぐって――19 世紀末、東アジア知識人の「国際」意識」、対馬会議（国際交流基金）、2008 年 7 月 26 日。

「自由与功利」、国際学術研討会「中国近代思想史上的自由主義」復旦大学歴史系、2008 年 9 月 14 日。

「中国近代の知識人は「文明」をどのように捉えたのか」、フォーラム「文明学の世紀」、JR 東海、京都洛翠、2008 年 9 月 24 日。

「近代中国における「文明」――梁啓超の「文明」理解を中心に」、京大人文研、「中国における翻訳概念の展開に関する研究」班（狭間直樹京大名誉教授）、10 月 11 日。

「近代中国における『文明』―明治日本の学術と梁啓超」日文研第 35 回国際研究集会「東アジア近代における概念と知の再編成」11 月 17 日～20 日。

「近代中国的文明――梁啓超与明治日本的学術」、中山大学歴史系「近代知識与制度体系転型」学術研討会、11 月 28－30 日。

「梁啓超の政治学」、京大人文研「中国長江南流域の歴史的景観」（京大人文研教授森時彦）、2009 年 2 月 6 日。

「梁啓超の「進化」論と「国際秩序」観――「東学」との関連をてがかりに」、国際高等研究所「１９世紀東アジアの国際秩序観」（吉田忠東北大学名誉教授）、2009 年 2 月 21 日。

〔図書〕（計　5　件）

孫江主編、中華書局、『新史学――概念・文本・方法』、2008 年、298 頁。

鈴木貞美・劉建輝編『東アジアにおける知的システムの近代的再編をめぐって』2008 年 230 頁。

黄愛平・黄興濤編『西学与清代文化』中華書局、2008 年、762 頁。

歴史学研究会編『世界史史料９――帝国主義と各地の抵抗Ⅱ』岩波書店、2008 年、2008 年。

崔博光『東北亜近代文化交流関係研究』山東大学出版社、2008 年、440 頁。

６．研究組織

(1)研究代表者

川尻 文彦(KAWAJIRI HUMIHIKO)
帝塚山学院大学・人間科学部・准教授
研究者番号：20299001

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし